Partir

VOL.3
2007.4

宮城学院女子大学
MG発──コミュニケーション情報誌"パルティール"

「Partir（パルティール）」はフランス語で"出発する"────
──新しい時代に飛びたとうとする女性たちを支え、励ますために、
宮城学院女子大学から発信するコミュニケーション情報誌です。

Partir
VOL.3
2007.4
宮城学院女子大学
MG発──コミュニケーション情報誌"パルティール"

発行／宮城学院女子大学　編集／宮城学院女子大学広報委員会　TEL:022(279)4698

宮城学院が大切にしたいこと

ボランティアを通した出会いと学び

東ちづるさん講演会

シリーズ **思索の森の案内人たち**

O.G. INTERVIEW 社会で活躍する卒業生たち

在学生の活躍を紹介! Students' Voice

MGの挑戦

MG Information

MIYAGI GAKUIN WOMEN'S UNIVERSITY

宮城学院が大切にしたいこと

ボランティアを通した出会いと学び

東ちづるさん講演会

宮城学院ではキリスト教の奉仕の精神に基づいて、学生たちのボランティア活動を奨励・支援しています。よりよい社会づくりと学生自身の人間的成長のため、学生たちがボランティア活動を通して感じ、学び得るものを大切にしたいと考えています。

女優 東ちづる さん

PROFILE

東ちづるさん　女優

ドラマや映画、司会、着物デザイン、エッセイ執筆など、幅広く活躍中。また、骨髄バンクやあしなが育英会、ドイツ平和村のボランティア活動を続けている。著書に『〈私〉はなぜカウンセリングを受けたのか』（マガジンハウス刊）など。

宮城学院女子大学の大学祭では、毎年さまざまなテーマを掲げ、講演会や展覧会などを開催しています。学科を越えて集まった有志でそうしたイベントを企画・運営をすることは、学生の主体的な学びの機会となっています。

今年は国際文化学科の富永智津子先生の発案により、「ドイツ平和村」を取り上げ、「戦争とドイツ平和村の子どもたち」写真展や、絵本『マリアンナとパルーシャ」（東ちづる著／主婦と生活社）原画展と読み聞かせ、そして平和村をはじめ、ボランティア活動に積極的に携わる女優の東ちづるさんを招いての講演会を行いました。

東さんの講演のタイトルは「泣いて笑ってボランティア珍道中～心豊かに自分らしく生きる」。生放送の出演を終え、会場に駆けつけてくれた東さんが背筋をスッと伸ばして壇上に立つと、会場は華やかな雰囲気に包まれました。

「対等」から学ぶ命の輝き 自身の内面とも向き合う

東さんが、ボランティアを意識したのは郷里の広島県因島で慢性骨髄性白血病に苦しむ高校生の姿をテレビで見たときでした。そのとき骨髄移植という治療法を知り、「自分に何かできることはない」かと思ったそうです。

それをきっかけに、骨髄バンクのボランティア活動を始めた東さん。ボランティアの仲間たちとは、「一緒に喜んだり、本気でケンカしたり。そこでは、お互いは比較することのない同等の命であり、相手を分かり合おうと努力する人間関係がありました」といいます。肩書きのない「対等な関係」が心地よく、東さんは活動にのめりこんでいったそうです。

そんな中、病気と闘う女子大生の「まほさん」との忘れられない出会いがありました。病気への理解と協力を求めて講演活動を行っていたまほさんを、東さんはボランティアとして支えていましたが、まほさんはその後、骨髄移植が受けられず亡くなってしまいます。東さんは、まほさんの遺した「病気になったことは不運だけど、決して不幸ではなかった。人生や愛、家族について考えるようになって人生が深く豊かになりました」という言葉が深く胸に刻まれているそうです。

自分を大切にすると他の人も大切に思えるようになるんです

東さんは、「ドイツ平和村」のこどもたちについても触れました。自身がテレビ番組で訪れて以来、講演や出版物を通してその活動精神を広く訴えているドイツ平和村は、1967年、ドイツ北西部の町オーバーハウゼンに設立されたNGO団体。世界の紛争地域や危機的状況にある地域の子どもたちを救済する活動で知られています。戦争や内乱に巻き込まれて負傷した子どもたちを無償で治療し、リハビリを行い、さらに平和村での共同生活を通して子どもたちに「再び母国で生きる力」を育んでいるのです。

「平和村にいたアフガニスタン出身のアリ君は、リンゴを一日にひとつ食べることが夢、と語りました。私が彼にリンゴをプレゼントすると、満面の笑みです。この喜びは誰かや何かと比較することはできません。お互いに懸命に分かり合おうとする、これも対等な関係なんですよね」。

平和村の子どもたちが背負う現実は確かに厳しいかもしれません。でも東さんは「彼らは彼らなりのたくさんの生きる喜びを知っている。ほかの誰か、例えば先進国の私たちと比べて不運だから不幸せとはいえない」と感じたそうです。

ボランティアを通して出会った人たちからは「生死に向き合って懸命に生きる姿に教えられることも多かった」と東さん。彼らとそんな対等な関係を築いていくうちに、命や自分らしく生きることの大切さを痛感させられたといいます。「自分の心にきちんと寄り添って、自分を大事にできるようになると、他人も大切に思えてきます。こういうことが分かるからボランティアはおもしろいんです」。

子どもたちの笑顔に励まされた写真展

――原画展も同時開催――

◆吉崎学長先生に説明するボランティアスタッフ

東さんの講演会に先立ち、大学祭期間中に平和村の現状を多くの人に知ってもらうための写真展「戦争とドイツ平和村の子どもたち」と、そこで暮らす子どもたちを主人公に、東さんが描いた『マリアンナとパルーシャ』という絵本の原画展を開催。写真展では、戦争によって心も身体も傷ついた子どもたちが見せる純粋な笑顔や、ボランティアの人たちとの交流の様子が紹介されました。学生による絵本の読み聞かせ会は、来場者の声により、回数を増やして開催されるなど好評を呼びました。

※写真展のみ、講演会当日も開催

やりたいと思ったときに、無理をしないで、自分にできることをする。構えることもない、やりたい気持ちがあふれ出たときがタイミングだー。ボランティアは『静かに溺れている人を助けるようなもの』とよくいわれるそうです。

15年間のさまざまな体験を生き生きと語る東さんに、会場はときに笑い、ときに涙して聞き入りました。終了後、「東さんがボランティアを続けている理由を知ることができて参考になった」「ボランティアはやってもらう、やってあげるという関係だけでないことが改めて分かった」などの声も。ボランティアの先輩からのメッセージをそれぞれの胸にしっかり受け取りました。

東ちづるさんを迎えて 茶話会

講演会を終えた感動のうちにお互いの労をねぎらいました

講演を終えて

講演会終了後、この会を企画・実行したボランティアスタッフが「茶話会」を開きました。まずはイベントが成功裡に終わったことを祝って、紅茶で乾杯。宮城学院創立120周年記念のオリジナル菓子を楽しみながら和やかに会がスタートします。

運営に携わった学生たちは「最初は先生からの指示を待っていた自分が、自分から提案や行動をできるように変わった」「たくさんの人に来てもらえるように、自分たちにできることを一生懸命考えた。これからも平和村をもっと多くの人に伝える企画を考えたい」「絵本を読んでいくうちに子どもたちや東さんの気持ちが分かるようになっていった」など、会場設営、受付、募金、広報、読み聞かせのグループごとに感想を発表。

また、講演を聞いて「世界が平和で幸せになるために、私たちがもっと知らなければならないことがたくさんあると思った」「自分の価値観だけで人を判断しない大切さを学んだ」「自分らしく生きたいと思った」などの感想を東さんに伝えました。

東さんからは「みんなが自分の言葉で語ってくれたのがうれしい。みんなの思いは、私が15年ボランティアをやってきて感じたことと同じです。平和村は昨年増築されました。本当はないほうがいい、なくならなきゃいけないことだけど、それまでは一緒にがんばりましょう」とエールをいただきました。

この後、東さんに写真展の会場に設置した来場者からのメッセージボードを披露し、集まった平和村への募金（80,222円）を贈呈。

宮城学院キリスト教センターから、今年のクリスマス献金は平和村へ送るという発表もあり拍手に包まれました。

短い時間でしたが、イベントを締めくくる素敵なひとときでした。

東さんを囲んで　ボランティアの学生・教員・職員と

ボランティア活動と反省 座談会

計画から実行、講演を終えてこれからの活動

この企画に携わった各グループの代表学生たちの座談会では、企画・運営に携わって感じたことや、これからについて意見を交わしました

司会　それぞれの係りの代表の皆さんに集まっていただきました。活動を終えての感想は？

熊谷　チラシの文章を作ったり、ポスターを貼ってもらう場所を探したりと、広報として、たくさんの人に来てもらうためにはどうしたらいいのか自分なりに考えました。ポスターは、子どもたちに見てもらいたかったので児童館にお願いに行ったりもしました。

箱崎　受付のシフト作りを通して実感したのは、大きな企画を成功させるためには一人ひとりの協力が不可欠ということです。

鈴木　実習と重なって準備が大変でした。ひとりができることは限られるのでみんなで協力することが大切。（担当の）募金は、善意であって強制ではないのでお願いが大変でした。

横田　会場設営では、写真の見せ方を工夫できたと思います。司会はスムーズな流れになるよう配慮しました。

阿部　平和村のことを「自分で伝えたい」と思って読み聞かせを担当しました。本番まで「東さんの思い」と「自分の思い」をどう伝えるか悩みましたが、お客さんの評判を聞いてやって良かったと思いました。聞いた人が考えるきっかけになればと思います。

本間　読み聞かせの音楽を担当しました。音楽で人の受け止め方も変わると思ったのでかなり悩みました。みんなと相談しながら、ハープの音色のCDを選びました。僕はサポートの立場でしたが、自主的に笑顔で活動している姿を見てこちらが勇気づけられたことも多かったよ。

土屋先生　学科を超え、一緒に活動していろいろ学びがありましたよね。講演の内容も心を打たれるものでした。

司会　平和村の子どもたちが欲しいのは同情ではないと思いました。「かわいそう」より、さらに歩進んだ思いを持ちたい。国際協力に興味があるのでまずは活動しようと思います。同時代に生きる者として考えさせられました。小さいことにくよくよせず、自分ももっと周りに目を向けていかなければ。

横田　平和村の子どもたちが欲しいのは同情ではないと思いました。「かわいそう」より、さらに歩進んだ思いを持ちたい。国際協力に興味があるのでまずは活動しようと思います。同時代に生きる者として考えさせられました。小さいことにくよくよせず、自分ももっと周りに目を向けていかなければ。

鈴木　同じ地球上で子どもを傷つけるのも人だけど、癒やすのも人なんだと思いました。これからの自分にどう生かしていきたいですか？

阿部　学外でも自分から働きかけ、活動の場を広げていきたい。

本田　演奏会をチャリティーにするなど工夫次第で自分にもできることがあると感じました。

箱崎　現実や過去の出来事を知ることが大事だと思いました。平和村だけに限らず、いろいろなことに目を向けたいですね。ボランティアは腰が軽くないとできません。これからは学校を動かすくらいのつもりで、学生側からの企画や提案を期待してます。

富永先生

座談会メンバー

◆受付　食品栄養学科3年・箱崎 香織理さん　◆広報　食品栄養学科3年・熊谷 希さん　◆会場設営・司会　国際文化学科2年・横田 はるかさん
◆読み聞かせ　国際文化学科1年・阿部 友理江さん　◆読み聞かせ音楽　音楽科4年・本間 麗さん　◆募金　食品栄養学科3年・鈴木 登志枝さん
◆富永 智津子先生（国際文化学科）　◆土屋 純先生（人間文化学科）　◆司会　戸野塚 厚子先生（食品栄養学科）

シリーズ

思索の森の案内人たち

「学問する」ということは、新しい知識の世界を開く喜びに満ちています。学ぶことは、きっとこれからの人生に輝きを与えてくれるはず――。そんな世界を案内してくれる先生方に、「学びの姿勢」についてお話を伺いました。

健康科学

発達臨床学科（小児体育）
白木 悦子 教授

スペシャルオリンピックスに思うこと

スポーツを通し自立を助ける

知的障害のある人たちのための「スペシャルオリンピックス」をご存知でしょうか。スペシャルオリンピックスは、アメリカに本部を置く世界的な組織で、日本では1994年に発足しました。障害のあるアスリートたちにトレーニングや競技会への参加を通して、健康を増進するだけでなく、能力や技術を磨き、家族や地域の人たちと喜びや友情を分かち合える機会を提供しようというものです。アスリートと家族、ボランティアが一緒に活動し、スポーツを通して社会参加をすることです。個人をあるがままに受け入れる社会につながる――。私は初代会長だった細川佳代子さんの講演を聞いて感銘を受け、宮城地区の組織の立ち上げからかかわってきました。

私はこの活動で体操競技のコーチをしていますが、指導する私自身がアスリートから学ぶことが本当にたくさんあります。今まで体操競技のトップアスリートを鍛え上げてきたその方法を、一から見直さなければならなかったし、指導の1つ1つに細心の注意がいる。でも、車椅子の子が4年かかって足を少し前に出せるようになったとか、自閉症の子が自分でトイレにいけるようになった、その一歩が本当にうれしい。家族やボランティアの人たちみんなで喜び、障害のあるなしにかかわらず、お互いに支えあっていくことの大切さを五感全部で感じることができたのです。

学生時代に学び、感じておくこと

8年ほど前から、ボランティアとして学生たちにもアスリートのトレーニングをサポートしてもらっています。昨秋、熊本で開催された全国大会にもサポートコーチとして参加してもらいました。援助する側にも大きな喜びや学びがある。授業だけでは出合えない貴重な経験になっていると思います。

学生時代はそうした、今しかできない、今しか感じられない何かがあるはずです。いろいろなことを経験して欲しいし、大学にはそのチャンスがたくさんあります。

指導者をめざす学生に一つ言いたいのは、自分自身体力づくりができていないということ。子どもに接する時は身体で表現する機会が多いですよね。幼稚園や施設などで子どもたちにダンスを教えるときだけでなく、日常生活の動作にしても、先生は見本にならなければならない。

思っている以上に子どもは、言葉よりも視覚でとらえる割合が大きいのです。授業の中で自分の体力の現状を知る機会も作っていますが、姿勢から見直してみることを勧めています。

環境工学・建築環境学

生活文化学科（居住環境学）
林 基哉 教授

福祉につながる建築学

健康で長生きできる住環境をめざして

住まいづくりというとインテリアやデザインの側が強調されがちですが、私の専門（環境工学・建築環境学）では、医学や気象学など幅広い知識を使って"健康で長生きできる"住まいづくりをテーマにしてきました。空調や照明一つをとって考えてみても、住環境が人の健康に与える影響はとても大きいのです。

最近の研究のひとつとして、新築の家に住む人が身体の不調を訴えるなどの「シックハウス症候群」があります。建物や家具などに使用された揮発性有機化学物質によるものですが、国土交通省などの総合プロジェクトで、このシックハウスの実態調査やメカニズムに関する実証実験、対策指針の作成、ハンドブックの作成を行いました。

学内に住居の構造体モデルを造り、天井裏や床下などの内部空間で発生した化学物質が室内へ侵入することを示した研究結果は、構造内部の建材のホルムアルデヒド発生量の規制や、床下の薬剤の規制などの建築基準法の改正につながりました。

また、地球温暖化対策の一環としてソーラーハウス普及のための設計技術、評価法の作成、マーケティング手法の確立などについての国際エネルギー機構IEAを通じた国際協力や、国土交通省による自立循環型住宅の開発にも参加しました。

身近な問題から先を見通す目を養う

前述の国の研究の中で、ゼミ生に自分の家の室内温度や空気中のカビを測定したり、電気やガスなど使用しているエネルギーを計算し、自分の生活でどれくらいのCO_2を出しているのか調べてもらいました。自分の生活を振り返ったうえで、大きな問題としての「地球の温暖化」について考える。大学で学んでいることは、自分のことともつながっている「身近な問題」なんだということを意識して欲しいと思っています。

衣食住は自分たちの生活に関することですが、学問として専門的に勉強して初めてわかることもたくさんあります。学生たちに伝えたいのは、現代のように生き方を選べる豊かな時代には、ぜひたくさん勉強をして知識を蓄えるべきということ。今ある問題と原因との因果関係を探り、先を見る目を養ってこれから起こり得る問題を考える。建築学というのは、人間の福祉のための学問です。幸せな人生のために、学生たちには目の前の現実の改善に楽観的に取り組む力を持ってほしい。

あきらめず、研究も人生も実現可能だと信じる気持ちが大切なんです。

これを読んでもっと詳しく――「おすすめの本」

●白木先生おすすめのDVD●

「ホストタウン」エイブル2
（株）ダゲレオ出版　3990円

2003年アイルランドのダブリンで開催された「スペシャルオリンピックス」夏季世界大会。
このとき、日本選手団の"ホストタウン"となったニューブリッジという町に暮らす、知的発達障害のある2人の少女を持つ大家族のドキュメンタリー映画です。

● 林先生おすすめの本 ●

「環境としての建築」
建築デザインと環境技術
レイナー・バンハム 著　堀江悟郎 訳
鹿島出版会　3045円

1969年ロンドンで発表された論文で、近代建築論への挑戦の書です。
名建築を環境としてみると見える無責任さを、時代を見据えて示しています。地球環境時代の必読書です。

社会で活躍する卒業生たち

O.G. INTERVIEW

「おいしい」といってもらえる食の仕事は本当に魅力的です

カゴメ株式会社東北支店
トマトキッチンスタジオコーディネーター
早川 智美さん

―キッチンスタジオコーディネーターというお仕事は？

食品メーカーの管理栄養士として、家庭向けのほか、学校給食や飲食店などの業務用の商品を使ったメニューの開発・提案が中心。料理教室やセミナーも行います。最近は食育に関する講演なども増えました。

お客様だけでなく、社員向けにも行います。ひとことで言うと営業支援ですね。管理栄養士として社内で初の採用だったので、一人で今のスタイルを作りあげるのは大変でした。いい上司や仲間に恵まれ、最近、やっと自分らしい仕事ができるようになったと思います。

―宮学生としての思い出は？

実習や研究が多かったけれど楽しかった。少人数のクラスでみんなで助け合ってがんばったのを覚えています。

実は、社会に出てからのほうが宮学生を意識する機会が多くて……。仕事に行き詰まったりして悩んだとき、宮学出身というつながりで、これまで面識のなかった他社の管理栄養士の先輩や大学の先生からいろいろアドバイスをいただいたりしているんです。宮学の絆に感謝しています。

―管理栄養士をめざす宮学生にアドバイスを。

「おいしい」って言われると本当にうれしい。「食」は生きるためだけでなく、コミュニケーションや楽しみでもありますよね。消費者（生活者）の目線が大切で自分の経験を生かせる仕事です。

学生時代に何でも挑戦していろいろ経験しておくと、自分の引き出しが増えると思います。自分の限界を感じたり、自信を無くしたりすることがあっても、可能性を信じてがんばって。私はそんなとき出会った人たちに助けられました。人とのつながりを大切にしてください。

早川 智美さん 1995年 家政学科・管理栄養士専攻卒

1995年、カゴメ株式会社入社。トマトキッチンスタジオコーディネーター・管理栄養士・惣菜管理士1級。
趣味はお菓子作り。最近習い始めたサックスは「音色にたまらなく引かれている」のだそう。

Students' Voice ～在学生の活躍を紹介！～

宮城県代表としてのデラウェア州での国際交流体験

私は昨夏、宮城県国際交流事業派遣学生として米国のデラウェア州のUniversity of Delawareで学び、同時に国際交流に努めて参りました。

午前中には大学附属英語学校で英語を学び、午後には大学で「Introduction to Women's studies」という授業を受講しました。授業では米国社会の問題を考えた上での男女のあり方や、米国の女性史を学びました。ペアやグループになって深く討論をし、さらに難しい多くの課題が出されましたが、とてもやりがいを感じました。

デラウェアでは大学の寮で生活をし、また出発前に計画していた私の主題である松島町や仙台市、そして日本の文化についてのプレゼンテーションを浴衣を着て行いました。趣味である茶道も披露し、多くの人が興味を示してくれました。自らを企画し、異国の地で進めたプレゼンテーションの成功に達成感で満たされました。

これらの経験を通して成長した部分が多くあり、真に世界に目を向けることができるようになりました。この成果を県の国際交流の材料として、また、自身の将来のために生かしてゆきたいと思います。

Ａ・Ｓさん
東文学科4年
宮城学院高等学校出身

宮城県国際交流事業派遣学生に選ばれ、昨夏1週間、宮城県の姉妹州であるメリーランドデラウェア州で学んできました。

「無型アクセント」の研究
―― 宮崎市での方言調査の成果

私は各地で方言を調査している人間文化学科の吉村ゼミに所属し「アクセント研究班」で調査をしています。

仙台に生まれ育った私は、この土地の言葉は「無型アクセント」という特徴があると知って、その実態を明らかにしてみたいと考えました。「無型アクセント」は遠く離れた愛媛県大洲市や九州などにも分布していて、2-3年次には大洲市で調査、そして昨夏は、2-3年生13人とともに、宮崎市において県庁、市役所などを会場に面接調査を行いました。この調査の様子は、地元紙に掲載され、代表で私のインタビューが記事になりました。

アクセントの特徴が高年層から若年層に向かって大きく変化していることが明らかになり、卒業論文に考察をまとめました。

仙台と同じアクセントが県で、宮崎大学の先生や学生の皆さんと交流を深めることができ、また多くの方とお話ししたことを通して、自身の言葉や日常を見つめなおす良い機会を得ることができました。

Ｙ・Ｅさん
人間文化学科4年
宮城県泉高等学校出身

仙台弁と共通の「無型アクセント」がみられる宮崎市で昨年夏休みに調査を行い、地元紙で報道されました。

健康増進普及月間ポスター厚生労働大臣賞に選ばれて

9月は、厚生労働省のための「健康増進普及月間」でした。その広報用のポスターに私の作品が選ばれ、全国各地の各種普及啓発事業、行事に幅広く活用されました。

大学で学んだ知識と自分の特技を生かし「卒業前にひと花咲かせる」ことができた！という嬉しいです。

ポスターは「一に運動 二に食事 しっかり栄養 適度にクスリ」という意図に合ったもの、というテーマで募集されました。メタボリックシンドロームの予防を背景に、楽しい極力絵らず、運動や食事の改善による健康な身体を作り上げていこう、という啓蒙が描かれます。すべての項目を詰め込んで、誰にでも分かりやすく、ストーリー性のある絵を心掛けて描きました。らせん階段の下にいる人が、階段を昇るという「運動」をしながら「食事」を摂取していく様子を絵の柄で表現し、だんだんと楽やたばこもやめて、健康になっていく姿を一枚の絵にしました。これを通して、自分の健康について考えて日々の生活を見直し、少しでも行動を変える人が増えたら、うれしく思います。

Ｋ・Ｍさん
食品栄養学科4年
宮城県宮城野高等学校出身

厚生労働省の健康増進普及月間ポスター募集に応募し、平成19年度厚生労働大臣賞（最優秀作品）に選ばれました。

※学生の学年は2007年3月現在のものです。

英文学科「伝統を英語劇でたどりませんか」展を開催

会場風景

英文学科では、宮城学院創立120周年を機に学科の歴史を振り返り、宮城学院の英語教育の伝統と今を伝えるプロジェクトを開始しました。その一環として「伝統を英語劇でたどりませんか」という展覧会を開催しました（会期:2006年10月21日～26日、於:礼拝堂）。

これは宮城女学校の時代から実施されていた「英語劇」のうち、英文学科の「名物」ともいわれ、市民にも愛された1950·60年代の公演活動に焦点をあてた展覧会です。当時指導にあたられた故ガーナー先生（1949年～1991年在職）が毎年の劇の記録や写真を遺しておいてくださったため、そこから教員の指導の熱心さ、学生たちの取り組みのひたむきさを感じとることができ、その姿を展覧会というかたちで伝えることにしました。

会期中、当時の劇に携わったOGの方々もたくさん来てくださり、会場は座談会などを通して在学生との交流の場ともなりました。

また英語劇指導にもあたられたランディス先生（1953年～1989年在職）もお越しくださり、当時大人気だった英語人形劇を披露してくださいました。この模様も含めて、今後は、120年の宮城学院の英語教育を伝えるブックレットを発行します。先人たちの残した尊い働きと培った伝統を覚え、それを大切に守りつつ、今後のあゆみにつなげていきたいと思います。

ランディス先生の人形劇（2006月10月24日）

先生に聞きました

● 私のおすすめ ●

音楽はジャンルを問わずお聴きになる小山先生。今回は特に、クラシックの魅力について語ってくださいました。

音楽科（作曲・理論）小山 和彦准教授

――小山先生をとりこにした音楽

クラッシックの魅力は、いっぱいありますね。クラッシックはポップスのようにビートをきざんでいることもあればそうでない時もあるし、いろいろなシチュエーションがある。だからおもしろいんですね。きっと。かつて生きていた作曲家と今、会話をしようとしても現実問題できない。けれど、音楽を奏でることでその作曲家と話ができる！　これが良さですね。音を出すことでその時代の作曲家の気持ちなどがよみがえり、自分のバイタリティーにつながっていくんでしょうね。

――学生へのメッセージ

当たり前なんですけど……「自分のやりたいこと」に徹底して継続的に取り組んでほしい。やりたいことをやるには「時間·体力·知恵」が絶対的に必要になってきます。今しかできないことはたくさんあります。それをやってほしいですね。今の時代、メールなどで手軽に相手とコミュニケーションがとれるのですが、時間をかけなければできないことがあります。それに、大学はいろいろな分野の先生や仲間が集まるところなので、人と出会い、関係をつくることで、自分の知らなかった分野へのドアが開く。それまで自分にはなかった価値基準ができるきっかけへとつながっていくと思います。

―おすすめの曲―

■ベートーベン
ピアノソナタ第32番第2楽章

■マーラー
交響曲第9番第1楽章

バルビローリ指揮
ベルリンフィルハーモニーの演奏がおすすめ

この2曲は、現世の人間の葛藤やいろいろなものをすべて超越している感じで好きですね。

◆このコーナーは「ニュースMG」学生スタッフが担当しました。

MG Information

MG news 宮学ニュース

宮城学院女子大学企画のイベントを紹介します

「ハートフル・シアター」が誕生 ―宮城学院らしいボランティアをめざして―

日本文学科2年表現ゼミ（深澤昌夫教授）の学生たちが手作り大型オリジナル絵本の読み聞かせ活動に取り組んでいます。グループ名は「ハートフル・シアター」。文字通り温かいハートが満ち溢れていることと共に、絵本の朗読だけでなく、音楽や身体表現を融合させた独自の活動を表現するために「シアター」と名付けられました。

初演は10月28日（土）宮城学院―20周年祝賀会にて、「ジジの誕生日」を宍戸茉純さん、松井美穂さん、熊谷道知子さん、杉千尋さんの4人が好演しました。もちろん、脚本・音楽・演出は深澤先生。―メートル四方の絵は伊勢文夫事務局長の力作です。「ジジの誕生日」は第2回ハートフル童話賞最優秀賞で、作者は日本文学科4年持地愛さん。ですから、先輩の作品を後輩の学生たちが演じたわけです。作品そのものが胸にジーンとくるのですが、最後には持地さんも舞台に登場し、会場全体が宮城学院の学生の実力とあたたかなハートに触れて感無量でした。

再演は12月18日（月）本学附属幼稚園で行われました。メンバーも西城あづささん、佐藤瑞穂さん、菱沼えりさん、岩松梓さんが加わって8人となり、写真右の七色の虹を大きく見せることができました。学生たちは園児たちの食い入るような瞳と反応のよさに圧倒されながらも、聴衆と一体化する喜びを体験したようでした。最後は、園児たちの握手ぜめと「また来てね―」コールに笑顔満面でした。

「沖縄八重山の芸能」を上演

幕が上がる。座開きの「赤馬節（あかんまぶし）」が響く。会場は一気に八重山の世界となり、800人の観客は水を打ったように静まりかえる。

11月25日（土）午後2時。宮城学院創立120周年企画「沖縄八重山の芸能」は開演。演目が進むにつれ、舞台と客席は一体となっていく。白眉は第1部最後の「ダートゥーダー」であった。小浜島結願祭で演じられていたというこの芸能に、客席は息をのみ、やがて舞台にあわせて手拍子がわき起こる。

第2部のテーマは「結（ゆい）」。雨乞いの厳粛な祈りにはじまり、稲作の労働に根ざした歌と踊り、そして収穫を終え豊年の喜びにわく「村の宴」となって舞台は最高潮に達した。「巻き踊り」では観客も交じって手をつなぎ、踊りの輪ができる。吉崎泰博学長もネクタイ姿で加わって、舞台の上でみごとな（?）踊りを披露。

公演が終わると「感動した」「もう一度みたい」という声が数多く寄せられた。今回の公演は琉球大学八重山芸能研究会（顧問・山里純一教授）創立40周年記念にあたってもいる。その重い伝統を十分堪能できた一日であった。

サークル・学友会情報

写真部

写真部では、デジタルカメラや一眼レフカメラなどを使って自由に撮影し、個人で作品を制作しています。また、プロの写真家を講師にお招きし講習会を行うなどして部員それぞれが更なるレベルアップをめざし活動しています。　定期的に開催する写真展は、さまざまな方に自分たちの作品を見ていただく貴重な機会です。皆さまのご来場をお待ちしています。

弓道部

私たち弓道部は、毎週火・木・金の週3回先生や先輩方から指導をうけながら活動しています。2006年度の活動では、東北総体、新人戦、春季・秋季大会に参加。そして、来年度からはⅡ部リーグ昇格という結果を残すことができました。その他、各大学との定期戦もあり、練習からは得られない反省点を試合から多々学び、日々の練習に励んでいます。

スカッシュサークル

私たちは、東北大学と合同で、キリンスポーツクラブで毎週活動しています。スカッシュは壁に囲まれたコートで相手と交互にボールを打ち合うという単純なものですが、相手の動きに注意しながらより打ちにくいところに打ち込むといった頭も使う楽しさがあります。まだあまり知られていないスポーツですが、実際やってみるとみんなハマります!!

campus calendar キャンパスカレンダー

4月　3日（火）	入寮式
4月　4日（水）	入学式
4月　7日（土）	音楽科新入生歓迎リサイタル
4月27日（金）	学友会春季総会（2校時）
5月　7日（月）	就職ガイダンス開始
5月　8日（火）	新入生歓迎会
5月29日（火） 30日（水）	日本文学科日本文学基礎演習研修旅行
6月16日（土）	大学後援会総会
6月21日（木）	キリスト教教育特別集会（3校時）
6月23日（土）	オープンキャンパス in spring
7月13日（金）～ 8月11日	英文学科海外研修（カナダ）
7月28日（土）	オープンキャンパス in summer
7月20日（金） 21日（土）	音楽科主催夏期講習会（高校生対象）
8月　3日（金）～ 8月24日（金）	国際文化学科海外実習（アフリカ）
9月上旬から3週間	国際文化学科海外実習（ドイツ他）
9月18日（火）	創立記念日
9月29日（土）	オープンキャンパス in autumn
10月20日（土） 21日（日）	大学祭
10月31日（水）	音楽科コンサート（楽々ホール）

音の響きあう風景

東三番町キャンパスの正門を入ると、いつもピアノやオルガンの音が響いている赤レンガ造りの大講堂があり、中庭には年輪の重みを持つ「噴水池」と、それを覆うような大木が四季折々の表情を感じさせ、心の安らぎを与えてくれました。

このような思い出のある旧校舎で、私は大学生活を過ごしました。

やがて、時が流れて１９８０年に、キャンパスは桜ケ丘に移転したのでした。

現在のキャンパスは広大で、いつも美しく整備されています。その中で特に私が注目したのは「礼拝堂とピアノ池」です。礼拝堂の前に「ピアノ池」と呼ばれる池がありますが、学生たちは、よくその池のほとりに集い、礼拝堂から響くオルガンの音を聴きながら懇談したり、写生をしたりする場となっています。

また、毎年クリスマスが近づくころには、礼拝堂のイルミネーションの点灯式が行われますが、その時には中学・高校生がピアノ池の前でキリスト降誕の喜びを歌います。

静寂な夜空に歌声が響き渡る光景に、喜びの感動を覚えます。この様子はＮＨＫテレビでも放映され、多くの方々にご覧いただけたと思います。

２００６年は創立１２０周年を記念し、学生・生徒の交流の場と、ボランティア活動をより活発にしようとの趣旨で、礼拝堂が増築されました。考えてみるとこの「礼拝堂とピアノ池」のある風景は、私が学んだ旧キャンパスの「噴水池」のある風景と共通していて、現在桜ケ丘キャンパスで学んでいる学生・生徒の心に響き、豊かな心を育てる大事な場所となっていることを思うと、感慨もひとしおです。

「創立１２０周年記念演奏会」が宮城県民会館で行われましたが、中学・高校生、大学生、教職員スタッフ、さらに多くの聴衆の方々の心がひとつになり、音楽会を盛り上げました。

日頃培われた音の響きあいが人々の心の響きあいとなり、喜びの感動を共有できた記念すべきこの日を、私は忘れることはないでしょう。

音楽科　布田　庸子

編集後記

“感謝とともに・・・”

今年は異常なほどの暖冬とかで、学内にも雪の積もる日がほとんどなく、京都の名勝金閣寺の雪景色にも例えられる名物「宮城学院のピアノ池と礼拝堂の雪景色」も、今年はとうとう見られずに春爛漫を迎えそうな今日この頃です。大学広報誌「パルティール」も一昨年10月の創刊号発行以来多くの方々のご協力をいただいてようやくここに「3号」を発行する運びとなりました。これも読者の皆さまのお励ましの賜物と編集者一同厚く感謝しております。本誌もやっと大学の広報誌として一人立ちすることができるまでに成長いたしましたが、今後も読者の皆さまの忌憚のないご意見をいただきながら、いっそうの内容の充実に努力していきたいと考えております。今後とも本誌をご愛顧くださるよう、編集者一同心よりお願い申し上げます。（M･Y）